

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13433

研究課題名（和文）ペットは子供の代わりか？：ペット飼育を通じた家族の再生産と変容？

研究課題名（英文）Having A Pet or A Child?: Reproduction and Transformation of Japanese Family?

研究代表者

藤田 典子 (Fujita, Noriko)

早稲田大学・国際学術院（アジア太平洋研究センター）・その他（招聘研究員）

研究者番号：30898341

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代社会で存在感が増しているペットに関して「家族ペット」論の視点で調査研究することを目的とした。研究者は、先行研究レビューの過程で「ペット共生社会」論も視角に入れ、社会におけるペットの意味も探究した。前者での問いは「ペットは子どもの代わりか」であり、20～50代の犬飼育者19人に質的インタビュー調査とフィールドワークで構成する文化・社会人類学的調査を実施し、対象者の意識と実践における共通点「動物飼育」と多様性「グラデーション」を発見した。後者の研究における問いは「人とペットの共生とは」であり、ペット取扱者27人への質的インタビュー調査から「共生」レトリックの様々な課題点を発見した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2020年以降、新たに飼育されるペット（犬・猫）の頭数が、新たに生まれる子どもの数を上回る現象が続いている。少子高齢化が加速する現代日本社会において、ペットの家族化が進展していることを示唆している。本研究は、「家族ペット」の家庭内での意味づけと、社会における意味について探究し、国内・外の学会大会にて報告し、これまでに1本の学術論文を公表した。質的調査から得られた結果は、アカデミックでは「家族の変容」に関する考察を通して家族社会学および社会人類学に貢献した。社会に向けては、ペット取扱者と非取扱者の間の非対称関係が顕在化したことにより、その境界に配慮した社会制度の整備の重要性について議論した。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to study "family pets" in contemporary Japan, through qualitative research methods. In doing so, the researcher included the perspectives and discussion on "human-pet coexistence" in Japan. The former focused on the rhetoric that pets are children and conducted anthropological research consisting of fieldwork and semi-structured interviews with 19 dog owners between the ages of 20 and 50. She figured out that dogs are not human substitutes for the owners, and besides, the owners' consciousness and practices in dog parenting are diverse and have gradations. For the latter focus, the researcher questioned what "human-pet coexistence" means and carried out 27 semi-structured interviews with pet-industry agents. She uncovered various issues, occurring in urban settings between pet-industry agents and non-agents, and pet owners and non-owners, which, she argues, are caused by clear segregation between human and animal beings in contemporary Japan.

研究分野：文化・社会人類学

キーワード：家族ペット 共生社会 少子高齢化 社会変容 実践 非対称関係 ケア

1. 研究開始当初の背景

コロナ禍の2020年から21年にかけて、日本でも、新たにペット（本研究では犬・猫を指す）を飼育する人が増えた（日本ペットフード協会 2021）。なぜ、増えたのか。一方で人の子どもの数は減少していた（厚労省 2021）。本研究は、この「犬猫が増え、子どもが減る」現象の意味を探ることから始まった。その背景として、ペットの意味が、以下の2つの枠それぞれにおいて、変容しているからではないかと考えた。その枠とは、第1は日本の家族、第2は日本社会である。

日本の家族とペットに関する研究は、家族社会学者の山田昌弘（2004）が展開している。山田（2004）は、田淵六郎（1998）による「ペットは家族の一員」というレトリックに関する研究を示しながら、質的調査を行い、主観的家族論の視点で「家族ペット」現象を発見した。ペットの飼い主は、「かけがえのなさ」や「自分らしさの追求」などの理由でペットを飼育しているとのことだった。

20年を経て、少子高齢化が加速する日本で、ペット関連総市場は成長の一途をたどっている（矢野経済研究所 2022）。令和の日本では、「家族ペット」がより深い意味を持っているのではないか。

そこで、本研究は「ペットは子どもの代わり」というレトリックを主の問いに据え、米国において「ペットは子どもの代わりではない」と示した Volsche（2018）による研究を分析枠組みとして質的調査を実施することとした。その結果から、令和の家族ペットが「人間の子ども」と比べてどのような存在であるか、その意味づけと日々の実践に関してミクロレベルで考察することとした。

第2の枠は日本社会である。徳田剛（2021）によれば、日本においてペットオーナーと非ペットオーナーは非対称関係にあり、共生を図る技法は、人と人との関係性から捉えることが重要である。令和の日本社会では、異質な存在として扱われ、「共生」がテーマとして掲げられる対象は、ペットだけではない。このような多様化社会で、環境省が原則とする「人とペットの共生」は具体的に何を目指して、どのように達成され得るのだろうか。その際、ペットはどのような意味を持つだろうか。

この問いに対して、本研究は、「ペット共生社会論」を理論枠組みとして、ペットの取扱者に質的調査を実施することとした。ペット取扱者の意識と実践から、令和の都市部の日本社会におけるペットの意味をメゾレベルで考察することとした。

2. 研究の目的

本研究は、以下の問いを明らかにすることを目的とした。

- 1、ペット飼育者および取扱者にとってのペットの意味と、飼育や暮らし、取扱の実態
- 2、当事者の意識や行為から見いだされる日本の家族の現状
- 3、家族、そして取扱現場のリアリティから浮かび上がる、日本社会の構造的課題
- 4、海外の実態や課題との接点やグローバル化下の共通課題

3. 研究の方法

研究方法は、質的インタビュー調査ならびに参与観察で構成する文化・社会人類学アプローチを採用した。インタビュー調査の対象者は、ペットを飼育する家族19人と、ペット取扱者27人（獣医師18人、犬猫保護団体の代表2人およびスタッフ1人、動物トレーナー2人、動物看護師および教育機関教員、ドッグランの管理者、ペット関連団体会長）であり、直接の依頼か、スノーボールサンプリング方式で集めた。地域特性も考慮に入れるため、対象者を関西、関東、中部圏の都市部生活者に限定し、半構造化インタビューを実施した。並行して、ペット飼育および取扱に係るグループの集会やイベント等にも参加した。

分析方法は、家族調査にはナラティブ分析、取扱者調査にはグラウンデッドセオリーアプローチを主として採用した。学会報告は、2022年度に国内で、2023年度に国外で実施した。研究のスケジュールを含む詳細は、以下の通りである。

2021年度～

先行研究レビュー

学会大会参加

日本社会学会第94回大会オンライン参加（2021年11月13-14日）

ヒトと動物の関係学会第28回学術大会オンライン参加（2022年3月12-13日）

取扱者調査開始

関西圏のペット取扱者への質的インタビュー調査ならびにペット取扱現場での参与観察実施（COVID-19感染予防のため近隣都市にて）・分析

2022年度～

取扱者調査継続

関東・中部圏のペット取扱者への質的インタビュー調査ならびにペット取扱現場での参与観察実施・分析

学会大会報告

日本社会学会第95回大会「猫社会学の応用と展開」において、「ペット飼育の主体者間のエンゲージメント」をテーマに報告（2022年11月12日）

家族調査開始

関西のある都市において、ペットオーナーへの質的インタビュー調査実施・分析

2023年度～

家族調査継続

関西のある都市でのペットオーナーへの質的インタビュー調査実施・分析

学会大会報告

AAS (Association for Asian Studies in Seattle)にて企画したパネル“Pets in Changing Japan”において、“Is your Dog your Child?”をテーマに報告（2024年3月15日）

4. 研究成果

研究の枠組みごとに、主要な発見と成果を記す。

本研究においても、日本社会のメゾレベルでのペットの意味は、徳田（2021）が示したように、非対称であることが分かった。調査対象者の全員が、ペットにまつわるトラブルは人との間で生じていると述べ、数々の問題や課題について語った。問題を解決するために、本調査のペット取扱者は、犬猫のことを第一に考え、問題を取り巻く人と、より深くかかわって（エンゲージして）（大倉 2020）いた。ペットを介して生じる様々な課題に直面した取扱者が、関係者との対話の場を設け、主体的に行動していたのである。その背景には、ほとんどの人が、現状はペット取扱者およびペットオーナー側と、ペットと無関係の人の間の相互理解が進んでいないと感じているために、時間をかけて対応することが重要であると動機付けしていたことが分かった。なぜ理解が進んでいないのか。それは、あるペットトレーナーが語ったように、「もしペットのことで隣の家の人とうまくいかなければ、その場を離れる」行動が対処法だからだ。現代日本の都市部においては、人と動物の境界線が明瞭で、境界を超え、社会全体で人と動物がかかわり合い、トラブルが生じれば、動物の側が引き下がらなければならないということである。言い換えれば、人と動物の間には、明らかな非対称

関係が存在するからである。「人とペットの共生」を推し進めようとするなら、まずこの非対称関係を前提とし、その関係の解消に向けてどのような指針や制度が必要か、議論を重ねていくことが重要である。

ミクロレベル、すなわち都市部の家族にとってのペット(本研究では犬)の意味は、山田(2004)が示したように「家族」であることは自明だった。一方、「あなたはペットを子どもと思うかどうか」は、ほとんどの対象者が「よく分からない」とし、その背景および理由づけは多様であった。それはまず、子どもと犬のそれぞれの定義あるいは意味づけが明確でないことが影響していた。この発見から、調査対象者にとって、子どもと犬の境界線が明瞭でないことが分かった。そのうえで有子家族にとっては、子どもと犬の相違点が、日々の生活実践およびインタビュー中の言語化の過程で自覚されていった。その結果は、Blouin(2015)による米国での研究と一部共通していた。一方、子どもがいない家族も、犬に対して日本特有な子育ての実践(Borovoy 2005; Tahhan 2014)を再生産してケアしていたが、生活の過程において犬は子どもとは異なる存在だと自覚していた。以上の結果から、令和日本の都市部の家族にとっても、米国のVolsche(2018)の発見と同様、ペットは子どもの代わりではない。犬は家族の一員であり、犬を子どもと同然で大事な存在だと語る人もいるが子どもの代わりではなく、家族ペットの意味は多様で、グラデーションを持つことが分かった。したがって、主観的家族論からすれば、日本の家族は、少なくとも過去数十年間、意識「どこまでが家族でなぜそう思うのか」と実践「どのようにケアしているか」において、再生産されていることが分かった。少子高齢化社会との関係においては、犬の数が増えたから人間の子どもが減っているわけではない。

今後の展開は、人とペットの関係をジェンダーダイナミックスの中でとらえることである。それは、メゾ・ミクロの枠の両方で、ジェンダー視点を取り入れ、ペット取扱および飼育におけるケアの意味について考察する研究である。保育や育児のアクターは、女性に偏っている。それはケアの主体者が女性に偏っているためである。ペット取扱および飼育においてはどうか。その傾向には、何が影響しているか。次の研究課題では、以上を掘り下げていきたい。

雑誌掲載論文

藤田典子 2023 『ペット取扱主体者間のエンゲージメント:「人とペットの共生」とは』
アジア太平洋討究 46: 75~92

引用文献

- Blouin, David D., 2015, "Are Dogs Children, Companions, or Just Animals?: Understanding Variations in People's Orientations toward Animals," *Anthrozoös* 26 (2): 279-94.
- Borovoy, Amy, 2005, *The Too-Good Wife: Alcohol, Codependency, and the Politics of Nurture in Postwar Japan*. Berkeley: University of California Press.
- 大倉健宏, 2020, 『エンゲージ「Engage」された空間 ペットフレンドリーなコミュニティの条件』学文社.
- 田淵六郎, 1998, 「ペットは『家族』か: 『家族』のレトリック」田中宏編著『社会学の視線』31-59, 八千代出版.
- Tahhan, Diana Adis, 2014, *The Japanese Family: Touch, Intimacy, and Feeling*. Oxford; New York: Routledge.
- 徳田剛, 2021, 「ペット共生社会論に基づいた猫社会学の方法論的視座」日本社会学会第94回大会テーマセッション『猫社会学の理論と方法』報告原稿.
- Volsche, Shelly, 2018, "Negotiated Bonds: The Practice of Childfree Pet Parenting,"

Anthrozoös 31 (3): 367-77.

山田昌弘, 2004, 『家族ペット やすらぐ相手は, あなただけ』サンマーク出版.
矢野経済研究所 2022 「ペットビジネスに関する調査を実施 2022年」

https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3053

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤田 典子	4. 巻 46
2. 論文標題 ペット取扱主体者間のエンゲージメント：「人とペットの共生」とは	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジア太平洋討究	6. 最初と最後の頁 75～92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57278/wiapstokyu.46.0_75	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 藤田典子
2. 発表標題 ペット飼育の主体者間のエンゲージメント
3. 学会等名 日本社会学会第95回大会「猫社会学の応用と展開」、追手門学院大学
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Fujita, Noriko
2. 発表標題 Is your Dog your Child?: Negotiating Pet Parenting
3. 学会等名 Association for Asian Studies (AAS 2024), "Pets in Changing Japan", Seattle (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------